

ハイデガー・フォーラム (2011年9月18日、龍谷大学深草学舎)

「正義」について——ニーチェとハイデガー

須藤訓任

ハイデガー自身が強調する意味で、まさに「問題含み *frag-würdig*」な解釈である、そのニーチェ理解のうちでも、発表者には「正義」に関する論究がきわだって *frag-würdig* であるように思われる。著作『ニーチェ』第二巻に収められた「ヨーロッパのニヒリズム」では冒頭、「ニーチェの思惟における五つの主要名称 *Haupttitel*」が挙げられているが、そのうちに数え入れられていなかった「正義」は、その次の章をなす（ただし分量的には前章「ヨーロッパのニヒリズム」の三分の一ほどである）「ニーチェの形而上学」においては、「力への意志」「等しきものの永劫回帰」「ニヒリズム」「超人」と並んで、ニーチェの「五つの根本語 *Grundworte*」の一つとしての位置（しかもトリの位置）を確保することになる。「主要名称」に挙げられながら「根本語」から脱落したのは、「これまでの価値の価値転換」である。「価値転換」は一時ニーチェによって、その理論的主著の題名ないし副題として構想されてもいたのだから、「主要タイトル」の一つであったことは間違いない。とはいえ、それは「力の意志」や「永劫回帰」などの諸思想からの帰結ないしそれらの目標としての性格をもっており、そのかぎり他の主要思想からの派生体であるともいえ、したがって「根本語」から削除されたとしても、必ずしも不思議ではない。しかし、だからといって、「価値転換」の代わりとして、なにか別の「根本語」が即座に必要なわけではないし、まして、その代替的根本語が「正義」でなければならないこと理由はさしあたりまったくと言ってよいほど、不分明である。むしろ、ハイデガーにそのことは先刻承知である。そればかりか、ニーチェ自身にしてから、「正義」が自分の思想の「根本語」であることが見えていなかった、というのだ。それも、たまたまニーチェの不注意や怠慢で見えなかったというのではあるまい。むしろ、ニーチェがニヒリズムの超克を言い、形而上学の転倒をぶち上げるかぎり、彼の思想は「反転」として形而上学に囚われつつ形而上学の完成となってしまうとともに、そのことが構造的に彼の視界からは逃れてしまうというのである。「正義」が真理の本質趨勢であること、及びそれがどのように本質趨勢であるかが、ニーチェの思惟のうちでは隠蔽されているが故に、

根本語「正義」がニーチェの形而上学の主要名称にまで高められるわけにもゆかないのである。」(II, S. 331)「存在史」の立場から思想を解釈するハイデガーは、「形而上学の歴史」の素養を欠いた(とハイデガーが判断する)ニーチェ本人より、ニーチェ思想のことがわかる——このことは何ら奇妙なことではない。奇妙なのはむしろ、そのハイデガーが「正義」解釈に関して独特な揺れを見せることである。そもそも、彼がニーチェにおける「正義」の重要性に思いを馳せるようになったのも、比較的時期が遅い。最初の二つのニーチェ講義(「芸術としての力への意志」および「等しきものの永劫回帰」)では、つまり、1936、37年段階では、「正義」への言及は皆無である。「正義」に関する論究が本格的に開始されるのは、38/39年の冬学期のゼミナール「ニーチェの第二反時代的考察『生に対する歴史の利と害について』の解釈に向けて」からであり、まとまった論述がなされるのはその次学期(39年夏学期)の講義「認識としての力への意志に関するニーチェの学説」においてである。さらに(40年の「ヨーロッパのニヒリズム」に関する講義を挟んで)、(予告はされたものの、実際には開催されなかった)41/42年冬学期の講義「ニーチェの形而上学」(先述)において再説された。少し他と性格が異なる「歴史の利と害」についてのゼミナールはいったん措いておこななら、「認識としての力への意志」では総分量200頁近くのうち、「正義」を論じているのはせいぜい20頁ほどなのに対し、「ニーチェの形而上学」では総頁80弱のうち同じく20頁が「正義」に当てられ、相対的に「正義」に関する比率が増大している。時期的なことや量的なことだけではない。前者も後者も双方の講義(及びそれに基づく著作)の当該部分は共通して「真理の本質」としての「正義」について討究しているには違いないのだが、前者が「合致(ホモイオーシス)」としての「真理」を問題にしているのに対し、後者が「正義」によって抉剔する「真理」とは、「ホモイオーシス」以前からの「非覆蔵性 Unverborgenheit」としてのそれなのである。矛盾とは言わないまでも、「正義」解釈のこうした揺れは、何を示唆しているのであろうか。この揺れは、なにより「存在の真理」を集中的テーマとした「存在史」の時期のハイデガーの、「真理の本質」に関する揺れであるだけに、いっそう注目に値する、すなわち *fragwürdig* であるように思われる。そして、ハイデガーのこの「揺れ」は、ニーチェの思想本体にどのような逆照射を及ぼすであろうか。